

仮想接触による外国人への差別的行動の好意的変化 — 個人特性と仮想内容の変化によるプロセスに着目して —

梅村重之

問題と目的

現代の人間社会の偏見や差別は社会的地位の低い少数派の様々なマイノリティが対象になることが多く、社会全体の問題として捉える必要がある。

そうした日本のマイノリティの中に外国人が挙げられる。日本に住む外国人は平成 28 年には 300 万人を超え(法務省, 2017), 日本を訪れる外国人も 2,404 万人に達している(日本政府観光庁, 2017)。グローバル社会の到来と共に差別的行動を変化させるアプローチの確立が急務である。

差別的行動を減少させるため、偏見への働きかけで外集団理解に繋げようとした接触仮説は、偏見の原因を相手に対する知識の欠如であるとし、相手と接触する機会を増やし、真の情報に触れることで偏見を減らすことができるとする仮説である(Allport, 1954 原谷・野村訳 1968)。

従来のアプローチの問題点を踏まえ、その解決につながるアプローチに仮想接触がある。仮想接触は外集団との相互作用の想像に基づく接触である(池上, 2014)。また、仮想接触は外集団との相互作用に伴う不安を解消し、外集団へのポジティブな感情を芽生えさせ、相互作用に対する自己効力感を高めることで偏見の改善を促そうとするものである。こうした観点から、仮想接触は異なる集団に対する偏見を減らすファーストステップとしての効果が期待され(Crisp & Turner, 2012), 介入の初期段階における効果的な方策とされている。

一方で仮想接触にはまだ明らかにされていない課題は多い。外集団への不安を解消し、外集団自体への興味・好意傾向を高め、将来の接触への意欲を高めるとしたプロセスが示される一方で、その背景となる個人における影響要因に関しては、ほとんど言及がない。仮想接触の効果に個人の経験と外集団への認識の特性がどう関連するのかを明らかにすることこそが、仮想接触を外集団への偏見やそれに基づく差別への方策として活用していく上での重要な知見になるといえる。

また、仮想接触の効果の上昇につながるプロセスに関しても、明らかになっていないことは多い。仮想接触の効果に影響を与える要因が想像の容易さのみであることは考えにくい。このように仮想接触に関しては、効果の向上への多角的な視点に基づく研究が不足しており、仮想接触の内容に基づく効果の違いの実証により、仮想接触の多様な選択肢を示すことができると考えられる。

以上を踏まえ、仮想接触を用いた異文化接触の効果に及ぼす要因、プロセスを明確化することを本研究の目的とする。そのために第 1 実験で、外国人に対する個人の経験や特性が仮想接触の効果に及ぼす影響を検討する。経験や特性とは、外国人との実際の接触経験の有無や外

国人に対するそれぞれの評価を意味する。これら接触経験や個人特性の影響を実験を通して実証することにより、仮想接触の効果に影響を及ぼす要因を明確にすることが可能になる。加えて第 2 実験において、仮想内容自体の変更に基づく、効果を高めるプロセスを提案する。第 1 実験において収集された仮想内容を踏まえ、教示された仮想内容の違いによって、どのような効果の違いが生じるのかを実証する。これらを通して、接触機会の少ない外集団に対するファーストステップとしての仮想接触の有用性を広げることにつなげられるといえる。

一方で検証を行う前に仮想接触の対象となる「外国人」とそのイメージがどう形成され、実際の行動に影響するかを明らかにする必要がある。仮想接触による接触経験の蓄積が外国人のイメージや実際の行動に影響することを示す上で、その関係性を事前に示すことが求められる。これらの検証を目的として予備調査を実施した。

予備調査

目的

多くの国を包含する外国人イメージがどのように形成され、その外国人イメージがどう実際の行動へと影響するかを明らかにする。

方法

調査対象者 国立大学生 160 人(男性 98 名, 女性 62 名)を対象とした。平均年齢は 20.14 歳であった($SD=1.03$)。

調査時期および実施方法 2017 年 1 月～3 月にかけて大学の講義時間の一部を利用し、集団単位で質問紙調査を実施した。

質問紙調査項目 1) フェースシート。2) 外国人イメージ: 村田(2007)の尺度を使用した。3) 接近回避: 小池・酒井(2010)の尺度を利用した。4) 5) ポジティブ・ネガティブな印象を持つ国の個数と評定: ポジティブ・ネガティブな国を挙げ、それがどの程度なのかを答える形式とした。6) 外国人との接触経験: 大槻(2006)における外国人との接触経験における項目を用いた。

結果

「外国人イメージ」の因子分析 「外国人イメージ尺度」10 項目について因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行い、「外国人能力」、「外国人親しみ」、「外国人信用度」の 9 項目 3 因子が抽出された。それぞれの該当する項目の得点を合計し、項目数で除することで第 1 因子「外国人能力得点」、第 2 因子「外国人親しみ得点」、第 3 因子「外国人信用度得点」とした。

「接近回避得点」の因子分析 「接近回避尺度」7 項目について因子分析(主因子法)を

行い、6項目1因子が抽出された。それらの得点を合計し、項目数で除することで、「接近回避得点」とした。

外国人との接触経験得点 外国人との接触経験項目に経験があったとした数を「接触経験得点」とした。

各得点の分析 接触経験得点、外国人能力得点、外国人親しみ得点、外国人信用度得点を総括する外国人イメージを用い、各因子間の影響を想定したモデルを作成し、共分散構造分析を行った。分析の結果、接触経験得点の増加がポジティブインパクトの増加につながり、そこから外国人イメージの上昇、そして接触回避得点の増加につながるということが有意に示された。

考察

まず、外国人との接触経験の積み重ねがポジティブインパクトの増加に繋がり、その影響がネガティブインパクトの増加に関連することが示され、そうしたポジティブ、ネガティブな認識が外国人全体のイメージに作用し、そうして形成された外国人へのイメージが実際の接触行動に影響することが明らかになった。以上のことから、接触経験の蓄積から形成されたポジティブ・ネガティブな国への認識が複数の国を包括する外国人全体のイメージに作用し、実際の行動に影響することが示唆された。このことから偏見や差別を抑制する仮想接触によるイメージの対象として多くの国を包括する外国人を選定する意義が示されたといえる。

本調査(第1実験)

目的

仮想接触による外国人イメージの肯定的変化を明らかにし、その効果への事前の外国人イメージと接触経験の影響を分析する。加えて効果的な仮想接触内容を選定するために仮想内容を収集する。

方法

調査対象者 大学生、大学院生 71名(男性 44名、女性 27名)を対象として実施し($M=22.08$, $SD=1.62$)、対象者に予備調査との重複はなかった。

調査時期 2017年6月～10月にかけて実施した。

調査内容 講義時間を利用して事前に質問紙に回答してもらった。後日同意を示した対象者に、個別で実験を行った。そこでは仮想接触を実施し、仮想内容の記述と事前に回答した質問紙から、4)を除いたものに回答してもらおうとともに、椅子の距離を用いた調査を実施した。

事前質問紙調査項目 1)フェースシート、2)外国人イメージ、3)接近回避、4)外国人との接触経験。いずれも予備調査と同様の項目を用いた。

事後質問紙調査及び仮想内容の確認項目 事前質問紙調査項目の1)～3)。加えて5)仮想接触の具体的な内容：仮想接触の内容を記述してもらった。

椅子の距離を用いた調査 椅子の距離：外国人との対談の準備をせよと教示し、準備する椅子の距離を外国人との距離感とした。

結果

尺度得点の算出 予備調査の因子分析で除外された一項目を除いた外国人能力得点、外国人親しみ得点、外国人信用度得点を合計したものを「外国人イメージ得点」とし、仮想接触後の外国人イメージ得点から仮想接触前の外国人イメージ得点の差をとることによって「外国人イメージ得点変化量」とした。また、予備調査の因子分析によって除外された1項目を除いて得点化を行い、「接近回避得点」とし、仮想接触後の接近回避得点から仮想接触前の接近回避得点との差をとることで「接近回避得点変化量」とした。加えて外国人との接触経験を測る質問項目の中で該当する項目数を「接触経験得点」とした。そして、事前の外国人イメージ得点($M=10.22$, $SD=1.78$)と接触経験得点($M=2.27$, $SD=1.50$)を高低に分け、事前の外国人イメージ得点と接触経験得点を要因とし、それぞれ各要因高低の2水準による分散分析を実施することとした。

外国人イメージ得点変化量 二要因分散分析の結果、外国人イメージ得点の主効果が有意になった($F(1, 67)=14.20$, $p<.01$)。また接触経験得点の主効果も同様に有意になった($F(1, 67)=5.37$, $p<.05$)。ただ、外国人イメージ得点と接触経験得点の交互作用は有意ではなかった($F(1, 67)=0.19$, $n.s.$)。

接近回避得点変化量 二要因分散分析の結果、外国人イメージ得点の主効果は有意であった($F(1, 67)=4.82$, $p<.05$)。また接触経験得点による主効果は有意ではなかった($F(1, 67)=0.64$, $n.s.$)。ただ外国人イメージ得点と接触経験得点の交互作用は有意ではなかった($F(1, 67)=1.28$, $n.s.$)。

椅子の距離 二要因分散分析の結果、外国人イメージ得点の主効果は有意ではなかった($F(1, 67)=0.24$, $n.s.$)。また、接触経験得点の主効果も有意ではなかった($F(1, 67)=0.58$, $n.s.$)。加えて交互作用に関しても有意ではなかった($F(1, 67)=0.01$, $n.s.$)。

仮想内容の集計 実験参加者が5)に答えた内容を集計、分類したところ「援助活動」、「自己開示」に分類される仮想内容が収集された。

考察

外国人イメージ及び接近回避得点の変化量において前もって外国人に対してどのようなイメージを持ち、外国人と接触した経験があるのかの影響が示された。すなわち仮想接触は前もって外国人イメージが低く、接触経験が乏しい対象者に効果的であり、加えて仮想接触は外国人イメージが高く、接触経験が豊富な対象者に効果が生じにくいことが示唆された。このことから、仮想接触は実際の接触経験の乏しい対象へのファーストステップとしての仮想接触の形が明確になったといえる。

しかし、一方で全ての分析において外国人イメージ得点と接触経験得点の交互作用は有意ではなかった。このことは外国人へのイメージと外国人との接触経験が連動して仮想接触の効果に影響するわけではないことが示されたといえる。ただ、外国人イメージ変化量に対する両

要因の主効果が示されていること、各変化量の平均値からは外国人イメージ得点、接触経験得点が少ないことが最も効果が生じやすいということも示されており、どう関係性が築かれているのか検証する必要性が依然として存在することが示唆されたといえる。

また、仮想接触における仮想内容を集計したところ、大きく分けて二つの観点に基づく仮想内容に分類された。まず、一つ目として道案内や児童生徒への学習指導といった「援助活動」が挙げられる。二点目として自己紹介や自分の趣味などの情報を提供する「自己開示」が挙げられる。これらの活動は仮想内容に占める割合も多く、個々の経験やイメージによらずに容易に想像しやすく、仮想内容として取り上げやすいものだといえる。

以上の考察を踏まえ、第2実験における仮想内容として援助活動、自己開示の活動を選定することとした。

本調査(第2実験)

目的

仮想内容の変化がどのような効果の違いを生じさせるかを検証する。仮想内容に援助活動、自己開示をそれぞれ教示した群と一緒に歩く活動(統制群)を教示した群の効果の違いを比較し、効果的な仮想内容を明らかにすることを目的として実施した。仮説は以下の通りである。

仮説 1: 仮想接触において「援助活動」、「自己開示」を仮想内容として教示された群が、統制群よりも外国人への認識である外国人イメージ得点が肯定的に変化する。

仮説 2: 仮想接触において「援助活動」、「自己開示」を仮想内容として教示された群が、統制群よりも外国人への実際の行動に至る認識である接近回避得点が肯定的に変化する。

方法

調査対象者 調査対象者として国立大学生、大学院生 56名(男性 24名、女性 32名)を対象として実施した。その際に実験対象者に対しては予備調査及び、第1実験との重複が無いように選定を行い、実験を実施した。調査対象者の平均年齢は20.98歳であった($SD=1.33$)。

調査時期 2017年11月～12月にかけて実施した。

調査内容 第1実験と同様の形式で事前の質問紙に回答してもらった後、実験を実施した。その際初めて出会う外国人との援助活動、自己開示を教示される群と統制群に実験参加者を分けて実施した。質問紙としては第1実験のものに援助活動、自己開示の有無を確認する調査項目への回答を加えた。

質問紙調査項目

事前質問紙調査項目 1)～4)、各調査項目は予備調査と第1実験と同様の項目を用いた。

事後質問紙調査項目 第1実験調査項目 1)～3)、5)を用いた。6)援助活動及び自己開示活動の確認：援助活動は中村・高木(1987)における援助活動の類型の中から、想像した活動を実験参加者が選択する形式とした。また、

自己開示は丹羽・丸野(2010)における自己開示の深さを検証する尺度を用い、自己開示の度合いを実験参加者が選択する形式とした。

結果

尺度得点の算出 予備調査、第一実験と同様の形式で算出した。そしてそれらの得点を用いて形成される、「外国人イメージ得点変化量」、「接近回避得点変化量」も同様に算出した。以上の項目を踏まえ、援助活動群、自己開示群、統制群の三つの仮想内容群に分類し、仮想接触前後に測定する事前の外国人イメージや接触経験を問う質問紙調査の結果から生じた、外国人へのイメージの認識や実際の外国人への行動に向けた認識の変化量に対して各仮想内容の分類を要因とした一要因分散分析を行った。

外国人イメージ得点変化量 一要因の分散分析の結果、各群間において有意な値は見受けられなかった($F(2, 53)=0.82, n.s.$)。

接近回避得点変化量 一要因の分散分析の結果、各群間において有意な値は見受けられなかった($F(2, 53)=0.78, n.s.$)。

考察

今回の結果からは、外国人イメージ得点変化量及び接近回避得点変化量という外国人への認識や実際の外国人への行動に向けた認識の変化において、仮想内容による違いが生じなかったことが指摘できる。つまり、仮想接触において仮想内容を「援助活動」や「自己開示」といったポジティブな内容として指示されることによって効果が上昇するという仮説1及び2が支持されなかったといえる。以上のことを踏まえると、仮想内容の変化というプロセスに基づく効果的な仮想接触の実施は個々の対象者による影響が生じるということなどからも、対象者を選ぶ手法であることが示唆されたといえる。

総合考察

1.仮想接触の個人特性による影響と課題

仮想接触が外国人への認識、実際の行動へ影響を及ぼす上で外国人にどのような認識を持ち、実際に接触してきたかが影響することが示された。このことから、仮想接触は前もっての外国人へのイメージが低く、接触経験が乏しい対象に対して効果的な手法だという結果を指摘できる。このことは仮想接触を偏見の抑制に向けた接触のファーストステップとして指摘してきた従来の見解を支持するものであるとともに、これまで明確に示されることのなかった、個人の要因による仮想接触への影響を明らかにすることができたといえる。

ただ、これらの検証を行う上で、比較の基準となる得点に関して、「接触経験」という枠組みの中で質的な面に視点を向けることができなかったこと、有意な値が生じなかった交互作用に関してより一層の検証の必要性が明らかになったといった課題が見受けられた。

2. 仮想内容の教示による効果へのプロセスの検証と課題

仮想内容を指示されることにより、仮想接触到に及ぼされるポジティブな影響が一概に生じるわけではないことが示された。つまり、ポジティブな仮想内容を指示されることによる仮想接触の効果への影響は、その対象となる参加者によって効果が生じるかどうかが変わってくるという形が明確になったと考えられる。ただ、これらの検証を行う上で教示される仮想内容の再検証、そもそも仮想内容を教示されるということによる影響の再検証といった課題が見受けられた。

3. 全体的な研究の課題と今後に向けて

まず全体的な課題の1点目として、実験対象者の選定が限定的な範囲にとどまってしまったことが挙げられる。日本における仮想接触の有効性を分析する上で1つの大学、1つの地域によらない選定が必要でもあったことは否定できず、他の発達段階における仮想接触の効果の検証が今後必要である。本当の意味での仮想接触の効果の要因と限界の検証を行う上で、より広い範囲で対象者を選定して検証することが必要になるといえる。

次に2点目として、日本という地域の特異性の検証が挙げられる。Pettigrew(2008)の指摘にあるように接触仮説に基づくアプローチや検証に関して多くのばらつきが生じていることも事実であり、日本社会独自の特色や傾向を検証する必要があると指摘できる。そもそも仮想接触に関する先行研究自体も日本とは地域性、国民性、風土の異なるアメリカにおける研究の蓄積であり、そのまま日本で活用できるのか確信が持てないのも事実である。日本という対象地域に適した仮想接触の形を検証し、より効果的な偏見、差別の抑制策としての可能性を検証することが急務である。

加えて3点目として、対象となる外国人の国籍ごとの検証が挙げられる。予備調査における回答においても、特定の地域における外国人へのポジティブ・ネガティブな認識の強さが見受けられた。それらを参照する限り、一概に「外国人」とまとめて仮想接触を実施しただけでは、すべての地域に対する偏見・差別の抑制策としての形を実証することに繋がったとはいえないという指摘もできることは否めない。個々の地域や国籍を限定した「外国人」に対する仮想接触の検証を実施し、個々の対象に適した仮想接触を模索していく必要がある。

最後に4点目として仮想接触の効果の異なる面からの再検証が挙げられる。今回は長い期間で外国人への認識や実際の行動への意識が変化したのかを分析することができなかった。しかし、偏見や差別への抑制という形で仮想接触を捉える以上、その効果の限界や実情を模索する必要があるといえる。その検証こそが、ファーストステップとしての仮想接触の姿を明確にするだけでなく、仮想接触の新たな面を見出す可能性もある。

以上のように今回の検証においては、その対象や期間、地域性といった様々な観点において課題が多々見受けら

れた。こういった課題を一つずつ解決し、よりよい仮想接触の姿を追求することが今後の仮想接触の形を明確にする知見として重要な意義を持つといえ、その解決が今後において急務であるといえる。

終わりに

今日の日本社会においても外国人との接触機会は増加しつつあり、多文化共生社会の実現のために、これまでの偏見・差別抑制策にとらわれず、新たな方策や取り組みにも柔軟かつ意欲的に取り組んでいく必要がある。それらを踏まえると、場所や時間といった様々な制限に捉われず、比較的实施が容易であるとともに、効果が実証されつつある仮想接触の検証は重要な意義を持つといえる。今後の仮想接触の日本における様々な状況、様々な対象に対する実証研究の一層の蓄積と進展に期待し、まとめとする。

引用文献

- Allport, G. (1954). *The nature of prejudice*. Reading, MA: Addison-Wesley. (原谷達夫・野村昭 (共訳) (1968). 偏見の心理 培風館)
- Crisp, R. J., & Turner, R. N. (2012). The imagined contact hypothesis. *Advances in Experimental Social Psychology*, 39, 125-182.
- 法務省 (2017). 政府統計の総合窓口 統計で見る日本 eStart 統計で見る日本 <<https://www.e-stat.go.jp/statsearch/files?page=1&layout=datalist&lid=00001196143>> 2017年 12月 26日
- 池上知子 (2014). 差別・偏見研究の変遷と新たな展開—悲観論から楽観論へ— 教育心理学年報, 53, 133-146.
- 小池 浩子・酒井英樹 (2010). 接触の度合いと外国人に対する態度 信州大学教育学部研究論集, 2, 87-98.
- 村田光二 (2007). アテネオリンピック報道が日本人・外国人イメージに及ぼす影響 平成16年度-平成18年度科学研究費補助金研究報告書, 1-50.
- 中村陽吉・高木修 (1987). 「他者を助ける行動」の心理学 光生館
- 日本政府観光局 (2017). 訪日外客統計の集計・発表 <https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/2016_december_zantei.pdf> 2017年 12月 26日
- 丹羽空・丸野俊一 (2010). 自己開示の深さを測定する尺度の開発 パーソナリティ研究, 18, 196-209.
- 大槻茂実 (2006). 外国人接触と外国人意識—JGSS-2003データによる接触仮説の再検討— 日本版 General Social Surveys 研究論文集, 5, 149-159.
- Pettigrew, T. F. (2008). Future directions for intergroup contact theory and research. *International Journal of Intercultural Relations*, 32, 187-199.